



世の中には、生まれつきの性別とは逆の性を生きようする「トランスジェンダー(性別越境者)」と呼ばれる人たちがいる。女装の実践・研究家である三橋順子さん(49)もその一人だ。三橋さんは男性だが、普段は女装し、社会的には女性として生きている。性転換手術は受けていないが、男性として生きることには違和感を感じ、自分らしい生き方を追求している。シリーズ最終回は、三橋さんに「差異」と「差別」の違いについて聞いた。【近松仁太郎】

——男性として生きることには違和感を感じたのはいつごろからですか。

思春期までは、勉強とスポーツに打ち込む普通の男の子でした。ところが18歳のころ、「もう一人の自分(女性人格)」に気づき始めました。確信したのは30歳の時。すでに男性として結婚もしていましたが、初めて女装をして「もう一人の自分」が実体化しました。自己嫌悪にもさいなまれましたが、多くの出会いを通し、男性と女性の両方の人生を背負いながら、積極的に社会に発言していこうと決めました。私は今、女性として活動しながら、最愛の妻と小学5年の息子の前では男性として生活しています。それがだれも傷つかない方法だと思ったからです。

——苦しいことも多かったの

は。

初対面の人にはたいてい「どこのお店ですか？」とまず聞かれます。「女装＝水商売」と、心の中で無意識に決め付けているのです。中には「お前にまともな話ができるわけがない」と言い切る人だっていました。

多数派は、少数派を排除しようと攻撃する習性があります。自分と異なるものに偏見を抱き、素直に受け入れようとしない。トランスジェンダーにかかわらず、少数派として差別され、悩む人は少なくありません。

決め付けは差別につながる

——中学生の間でも、少数派が攻撃されるような場面は考えられますか。

野球をしたいという女子に対し、男子が「女らしくない」と認めないこと

男らしさ、女らしさと

いった「ジェンダー(社会的・文化的な性差)」をはじめ、「中学生らしさ」などの基準にあまりこだわり過ぎないことです。でも残念ながら、男女のイメージが独り歩きし、半ば制度的な縛りを持つことも少なくない。私は「男なんだから泣くな」と言われて育ちました。その結果、今、女性の格好をしても、泣きたいときに涙が出てきてくれません。

世の中にはいろいろな人がいます。足が速い子や、歌が上手な子、機械に詳しい子……。まずは男女に

女装家・三橋順子さんに聞く

個性認めてもらう努力を

があります。ここで、素直に「よし、やろう」と言えるか、「女のくせに変だ」と軽蔑してしまうか。大きな分かれ目です。確かに平均値を見れば、女子より男子の方が体力がある。それはもともとある男女の身体的な「差異」です。しかし中には、男子より力があったり、野球好きな女子がいたりして不思議じゃないはず。すべてを平均値で判断し、決め付けるのはよくありません。決め付けは「差別」につながり、多数派による少数派への攻撃がエスカレートすると、いじめに発展します。

——差別をしないために、気をつけべきことは何でしょう。

関係なく、自分にできないことができる友達を素直に「すごい」と尊敬する気持ちを持つことが大事です。

——逆に、自分は少数派だと悩んでいる中学生にアドバイスをお願いします。

トランスジェンダーとして生きていて、大変なこともたくさんありましたが、今、講演会には多くの人に来てくれます。大学で講師をした時は、何人もの学生に「4年間で一番良い講座でした」と感謝されました。それは、自分が努力した結果です。

中学生のみなさんも、他人に「変だ」と指摘されても、すぐに「自分はダメ



「自分の個性を大事にしてほしい」と語る三橋さん

◇プロフィール

みつはし・じゅんこ(女性としての通称)

東京都目黒区在住。1955年生まれ。女装家。2000年度、中央大学文学部兼任講師(社会学)に任用され「日本初」のトランスジェンダーの大学講師として注目を集める。現在、同大社会科学研究所の客員研究員、国際日本文化研究センターの共同研究員、トランスジェンダー社会史研究会幹事を務め、講演会やトランスジェンダー社会史研究、人生相談などに幅広く活動している。

なやつだ」とうつむかないでください。もちろん数学のテストで30点しか取れないことを個性とは呼べませんが、足りない部分は補いつつ、自分にしかできないことを「個性」や「チャームポイント」として周りに認めてもらう努力をしてほしいです。

(このシリーズ終わり)